

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00445

研究課題名(和文) サンクト・ペテルブルクにおけるロック文化の研究 - - セルゲイ・クリョーヒンを軸に

研究課題名(英文) A Study of Rock Culture in St. Petersburg; Focusing on Sergey Kuryokhin

研究代表者

鈴木 正美 (Suzuki, Masami)

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：10326621

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：サンクト・ペテルブルクには20世紀後半、独自のロック音楽が生まれ、発展していった。ロックに関わったのは音楽家だけではない。特に非公式芸術の詩人、作家、美術家、演劇人等さまざまな人物がジャンルの垣根を越えて交流し、協働し、多様な音楽や作品を創造した。そして複雑な人的ネットワークを築いた。そのネットワークの中でも中心的な人物がセルゲイ・クリョーヒンだった。本研究ではサンクト・ペテルブルクのロック文化と非公式芸術およびクリョーヒンに関する資料の収集・調査をし、多面的なアプローチを行うことによって、20世紀後半から現代に至るサンクト・ペテルブルクの文化の多面的・複合的特質の解明を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、サンクト・ペテルブルクにおける 1) ロック文化の進化と変容、2) 非公式芸術の誕生と発達、3) 人形劇と他ジャンルとの交流と協働、という3つのテーマを核にし、資料の収集、調査を行った。3つのテーマは密接かつ複合的に関係している。非公式芸術は、美術、文学、音楽、映画、演劇等のさまざまな芸術ジャンルの間での交流が盛んだった。ロック・バンドがジャズ・バンドと共演するばかりか現代音楽との共演も度々あった。ダンスやパフォーマンス、詩の朗読などとの共演も盛んだった。こうした文化に関する資料の収集・調査、分析によって、サンクト・ペテルブルクの文化の多面的・複合的特質の一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In St. Petersburg, in the latter half of the 20th century, original rock music was born and developed. Musicians weren't the only ones involved in rock. In particular, various figures such as unofficial poets, writers, artists, and theater people interacted and collaborated across genres to create a variety of music and works. And they built a complex human network. The central figure in the network was Sergey Kuryokhin. In this study, we collected and investigated materials related to rock culture and unofficial art and Kryokhin in St. Petersburg. And by taking a multi-faceted approach, we attempted to elucidate the multi-faceted and complex nature of St. Petersburg's culture from the late 20th century to the present day.

研究分野：ロシア文化

キーワード：ロシア 非公式芸術 外国文学 比較文学 現代詩 芸術諸学 ジャズ ロック

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者による『ペレストロック詩集』(1990)の出版以来、ロシアのロックに関する資料を代表者は収集し続けている。また、代表者は20世紀初めから1940年代までのロシアのジャズと大衆歌謡に関する論文を継続的に発表してきたが、ついに1950年代以降の大衆歌謡を扱う段階に入った。当然ロックについても詳細に論じる必要があり、必然的に本研究を着想するに至った。

本研究は、基盤研究(C)「20世紀後半のロシア・中欧における非公式芸術の総合的研究」(平成18年度～20年度)を発端として、基盤研究(C)「ソ連非公式芸術とジャズ文化——創造の場とネットワーク形成に関する研究」(平成21年度～23年度)、基盤研究(C)「ソ連邦崩壊前後のアンダーグラウンド芸術の変容に関する研究」(平成24年度～26年度)および「1980年代ソ連のグローカル・アヴァンギャルド 地方都市の前衛芸術に関する研究」(平成27年度～29年度)をさらに発展させたものである。

先の研究で多くの資料を収集し、非公式芸術やジャズ文化に関わった多くの人々と知己を得たことで、さらに次の研究への礎を築いたことは確かである。しかし、それだけではまだ不十分であり、さらに資料の収集を必要とした。先の研究で得た人的資源を活用して、さらにサンクト・ペテルブルクのロック文化やセルゲイ・クリョーヒンに関わった芸術家、詩人、音楽家等に現地でも会い、聞き取り調査をする必要があった。

非公式芸術に関する個別の研究やペレストロイカ期の文化や芸術に関する研究はもちろん多くあるが、本研究のように非公式芸術と公式芸術との関係、芸術諸ジャンル間の関係、ジャズ・ロック・カルチャーとの関係、人形劇との関係でロシアの前衛芸術、特にサンクト・ペテルブルクのそれを扱った研究は少ない。従って、サンクト・ペテルブルクのロック文化やセルゲイ・クリョーヒンについてさらに研究する必要があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、サンクト・ペテルブルクのロック文化と非公式芸術に関する資料の収集・調査はもちろんのこと、この文化と芸術に関わった芸術家、音楽家、詩人などに現地でも聞き取り調査をし、多面的なアプローチを行うことによって、20世紀後半から現代に至るサンクト・ペテルブルクの文化の多面的・複合的特質を明らかにすることにある。

本研究代表者の鈴木正美はこれまでロシアのジャズと非公式芸術および人形劇を対象に長年にわたって研究を続け、科学研究費の補助も受けて、『ロシア・ジャズ』(2006)や『どこにもない言葉を求めて 現代ロシア詩の窓』(2007)等の単著の他、多くの論文を発表してきた。その内容は、ロシアのジャズ、大衆歌謡、現代詩、非公式芸術に関するものがほとんどである。ロシアのロックに関しては『ペレストロック詩集』(1990)や数編の評論のみで、本格的な論文はいまだに著していない。クリョーヒンに関して“Sergei Kuryokhin and Avant-garde Music: 1980-90.”(2001)やいくつかの評論を発表したが、ジャズとの関連で述べている内容がほとんどである。ロシアのロック文化に関しては、日本では本格的な研究がほとんどなされていないのが現状である。また、日本でもロシアの現代美術に関する研究はかなり盛んになったものの、サンクト・ペテルブルクの非公式芸術に関する研究は拙論「ペテルブルグの芸術 美術都市と反コンセプトチュアリズム」(2007。望月哲男編『創像都市ペテルブルグ』所収)を除くとほとんどない。ロシア本国ではロックに関する資料は多く出版されており、非公式芸術に関して研究が進んでいる。しかし、それらはあくまでもロックのみ、あるいは非公式芸術のみの研究でしかない。従って、サンクト・ペテルブルクのロック文化を非公式芸術やその他さまざまな芸術ジャンルの交流と融合といった視点から研究する本研究は独自のものであり、ロシアとりわけサンクト・ペテルブルクの文化の特質を明らかにする点で創造的なものとなることが期待された。

3. 研究の方法

当該研究では、サンクト・ペテルブルクにおける1)ロック文化の進化と変容、2)非公式芸術の誕生と発達、3)人形劇と他ジャンルとの交流と協働、という3つのテーマを核にし、以下のように研究した。

1)1950年代から現在に至るロシアのロックは独自の発達を遂げたが、サンクト・ペテルブルクのロックはさらに独自の道を歩んだ。1981年、レニングラード(現サンクト・ペテルブルク)に最初のロック・クラブが設立されて以来、コンサートの開催は活発化し、そこで頭角を現したのがボリス・グレベンシチコフとセルゲイ・クリョーヒンである。ロックに関わった多くのミュージシャンは金銭を目的とせず、ひたすら新しい音楽を追究した。特にセルゲイ・クリョーヒンは早くからエレクトロニクス、ノイズを自分の作品に取り込み、「ポップ・メハニカ」では諸芸術ジャンルを融合させた錬金術のようなステージを創出した。このクリョーヒンの後を継いだ若いミュージシャンたちの多くが、さらにエレクトロニクスやノイズ音楽を発展させ、現在サンクト・ペテルブルクはロシアにおけるノイズ音楽の中心地となっている。こうしたサンクト・ペテルブルク独自のロック文化の進化と変容について調査、分析した。

2) 公式と非公式、日常と非日常という二重の文化構造の中で、1960-80年代のソ連人は芸術を享受していた。モスクワでは、概念や言葉だけが重視されるモスクワ・コンセプチュアリズムが1980年代の芸術の中心だったが、レングラードにはコンセプチュアリズムがほとんど存在せず、その代わり非公式芸術家グループ「アレフィエフ・サークル」のようにさまざまな表現が試みられた。ユートピア都市であるソ連の首都モスクワから見れば、レングラードはソ連の辺境、ヨーロッパ型ロシアの地方都市であった。しかし、そのためにかえってモスクワにはない、さまざまな表現を可能にしたのである。そうしたサンクト・ペテルブルクの非公式芸術を調査・分析した。

3) ソ連時代にはさまざまな人形劇が上演されてきた。人形劇は公式の芸術だったが、そこから派生した前衛的・実験的な人形劇も多くあった。特にサンクト・ペテルブルクには人形劇学科のある大学(現ロシア国立舞台芸術大学)があり、多くの人形劇作家や俳優を輩出した。モスクワとは違った先進的な演出の人形劇が多く上演されてきており、その中にはロック音楽や非公式芸術の人々も多く関わっていた。こうしたサンクト・ペテルブルクの人形劇文化を調査、研究した。

以上3つのテーマは密接かつ複合的に関係している。非公式芸術は、美術、文学、音楽、映画、演劇等のさまざまな芸術ジャンルの間での交流が盛んだった。ロック・バンドがジャズ・バンドと共演するばかりか現代音楽との共演も度々あった。さらにダンスやパフォーマンス、詩の朗読などが同じステージに立つことも珍しくはなかった。また、非公式の芸術家たちがそうしたイベントの常連客だった。人形劇の世界では舞台外で独自の人形をつくる作家がいて、これらがまた非公式芸術の世界で用いられたりもした。

本研究では3つのテーマによる多面的アプローチによって、サンクト・ペテルブルクにおけるロック文化に関する資料の収集・調査をするだけでなく、この前衛的な芸術・文化に関わった芸術家、音楽家などに現地で聞き取り調査をし、諸資料を分析することによって、サンクト・ペテルブルクの文化の多面的・複合的特質を解明しようと試みた。

まず、研究代表者である鈴木正美を研究の統括者として、研究メンバー(研究協力者)を下記のようなグループに分け、それぞれの領域で研究を進めた。

- (1) 「サンクト・ペテルブルクにおけるロック文化の進化と変容」研究グループ(岡島豊樹、中野圭、セルゲイ・レートフ、アレクセイ・ボリーソフ、アレクサンドル・ベリャーエフ)
- (2) 「サンクト・ペテルブルクにおける非公式芸術の誕生と発達」研究グループ(鈴木正美、ミハイル・スホーチン、リュドミーラ・ドミートリエヴァ)
- (3) 「人形劇と他ジャンルとの交流と協働」研究グループ(大井弘子、吉原深和子、ナターリヤ・コストローヴァ)

(1)(2)のメンバーはいずれもセルゲイ・クリョーヒンと直接関わっている。特にセルゲイ・レートフはクリョーヒンと何度も共演している。ミハイル・スホーチンはサンクト・ペテルブルクの詩人たちとの広い交友がある。(3)の大井弘子とナターリヤ・コストローヴァはロシア国内の人形劇関係者と多くつながっている。研究グループの各メンバーが毎年モスクワとサンクト・ペテルブルクを中心に現地調査を行った。また海外の研究協力者を日本に招へいしての研究會、公開シンポジウムを行った。しかし、コロナ・ウィルス感染拡大に伴い、令和2年度および3年度は現地踏査は行わず、メールとzoomによる研究打ち合わせ、調査のみとなった。また、公開研究会はzoomで開催した。

4. 研究成果

(1) 2018年度

研究会の開催

平成30年度に次の2回の公開研究会を行った。第1回研究会「ポスト・クリョーヒン・スタディーズ」(2018年5月27日、水道橋Ftarriで開催。報告者:鈴木正美、岡島豊樹)、第2回研究会「ポスト・クリョーヒン・スタディーズ」(2019年2月23日、新潟大学人文学部で開催。報告者:鈴木正美、岡島豊樹、工藤遙)。

海外における現地調査

鈴木正美は2018年11月17日-24日、サンクト・ペテルブルクのセルゲイ・クリョーヒン現代芸術センターおよびサウンド・ミュージアムで現地調査を行った。また、2019年3月14日-21日、モスクワの文化センター「ドム」、現代美術館「ガレージ」で研究調査、資料収集を行った。サンクト・ペテルブルクでは研究協力者のロマン・ストリャールのコーディネートでアナスタシア・クリョーヒナ、ドミトリイ・シューピン、ニコライ・ルバーノフ等に聞き取り調査を行い、多くの資料を入手した。また、モスクワでは研究協力者のセルゲイ・レートフ、リュドミーラ・ドミートリエヴァと研究打ち合わせを行うと共に、貴重な資料を提供された。その他、諸関係者と面会し、多くの資料を入手することができた。

(2) 2019年度

研究会の開催

平成32年度(令和元年)に次の2回の公開研究会を行った。第1回研究会「ポスト・クリョーヒン・スタディーズ」(2019年6月9日、水道橋Ftarriで開催。報告者:鈴木正美、岡島豊樹)、第2

回研究会「ポスト・クリョーヒン・スタディーズ」(2020年1月18日-19日。水道橋Ftarriで開催。報告者：鈴木正美、岡島豊樹、山田光、アレクセイ・クルグロフ)。

海外における現地調査

鈴木正美は2019年12月11日-18日、モスクワの文化センター「ドム」、現代美術館「ガレージ」、国立現代美術センターおよび「Art of Doll 展」で研究調査、資料収集を行った。また、研究協力者のセルゲイ・レートフ、アレクセイ・ポリソフ、アレクサンドル・ベリヤーエフと研究打ち合わせを行うと共に、貴重な資料を提供された。その他、諸関係者と面会し、多くの資料を手に入れることができた。

(3) 2020 年度

研究会の開催

本来ならば、サンクト・ペテルブルクとモスクワで研究調査を行い、その調査報告を公開研究会で行う予定だったが、新型コロナ・ウィルス感染が拡大する中、現地調査は断念せざるをえなかった。対面での公開研究会は行わず、お互いにメールで連絡を取り合いながら、個別の研究を進めた。

海外における現地調査

上述の通り、新型コロナ・ウィルス感染が拡大する中、現地調査は断念せざるをえなかった。当該年度は補助事業を一時中断し、次年度まで延長することになった。

(4) 2021 年度

研究会の開催

令和3年度に次の2回の公開研究会を行った。第1回研究会「ポスト・クリョーヒン・スタディーズ」(2021年9月19日、zoomで開催。報告者：鈴木正美、岡島豊樹)、第2回研究会「ポスト・クリョーヒン・スタディーズ」(2022年3月19日、zoomで開催。報告者：鈴木正美、岡島豊樹、土肥理香)。

海外における現地調査

新型コロナ・ウィルス感染が終息しないため、現地調査は断念せざるをえなかった。海外の研究協力者とはメールおよび zoom により連絡を取り合い、資料収集や踏査を行った。

(5) 研究成果の刊行

研究代表の鈴木正美は研究成果として次の論文を発表した。

- a) 鈴木正美「短波放送からの声——「雪どけ」期のジャズと大衆音楽(2)」
 - b) 鈴木正美「クラブとカフェの誕生——「雪どけ」期のジャズと大衆音楽(3)」
 - c) 鈴木正美「ジャズ・フェスティバルの熱狂——「雪どけ」期のジャズと大衆音楽(4)」
- 研究協力者の岡島豊樹は次の小論の他に、Web サイト(ブログ)「東欧ロシアジャズの部屋」<http://jazzbrat.exblog.jp/> に多くの論考を発表している。
- 研究代表の鈴木正美と研究協力者の岡島豊樹は次の誌上でロシアのジャズの特集を企画し、各々小論・記事を発表した。
- JAZZ PERSPECTIVE, vol.18, July. 2019, 特集「Jazz in Russia」
- a) 鈴木正美：「ロシア・ジャズを知るための本当の話」(36-38頁)
「ロシア・ジャズ小史」(48-55頁)
「ジャズはオデッサで生まれた音楽なのか？」(56-57頁)
「ロシアのフリー/前衛ジャズ」(82-85頁)
「サンクト・ペテルブルクのジャズ・シーン」(92-94頁)
「ロシアのジャズ・ジャーナリズム史」(98-101頁)
 - b) 岡島豊樹：「FAQ and Keywords for the Exploration」(39頁)
「ロシア/ソ連ジャズのレコード・ジャケット展」(40-47頁)
「ロシアのレーベル探訪」(105-109頁)
「ロシア・ジャズ人名事典[入門編]」(112-123頁)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 鈴木正美	4. 巻 148
2. 論文標題 ジャズ・フェスティバルの熱狂：「雪どけ」期のジャズと大衆歌謡(4)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文科学研究	6. 最初と最後の頁 19-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鈴木正美	4. 巻 146
2. 論文標題 クラブとカフェの誕生：「雪どけ」期のジャズと大衆歌謡(3)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文科学研究	6. 最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鈴木正美	4. 巻 18
2. 論文標題 ロシア・ジャズ小史：エストラダからジャズ・アートへの道程	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JAZZ PERSPECTIVE	6. 最初と最後の頁 48-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鈴木正美	4. 巻 18
2. 論文標題 ロシアのジャズ・ジャーナリズム史：新聞・マガジン・研究者・ネット	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JAZZ PERSPECTIVE	6. 最初と最後の頁 98-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木正美	4. 巻 第144輯
2. 論文標題 短波放送からの 声 : 「雪どけ」期のジャズと大衆歌謡(2)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文科学研究	6. 最初と最後の頁 17-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 鈴木正美
2. 発表標題 ジャズ・ラジオ・クラブ・カフェ 1950-60年代ソ連の若者文化
3. 学会等名 日本比較文学会関西支部シンポジウム
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Masami Suzuki's Web Site -- Avant-ganko http://www2.human.niigata-u.ac.jp/~masami/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	岡島 豊樹 (Okajima Toyoki)	著述業	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中野 圭 (Nakano Kei)	大阪芸術大学・芸術学部・准教授 (34405)	
研究協力者	レートフ セルゲイ (Letov Sergei)	音楽家	
研究協力者	ボリーソフ アレクセイ (Borisov Aleksei)	音楽家	
研究協力者	ベリヤーエフ アレクサンドル (Belyaev Aleksandr)	ロシア国立研究大学高等経済学院・東洋学・西洋古典学研究所・上級講師	
研究協力者	スホーチン ミハイル (Sukhotin Mikhail)	詩人	
研究協力者	ドミートリエヴァ リュドミーラ (Dmitrieva Lyudmira)	音楽プロデューサー	
研究協力者	大井 弘子 (Ooi Hiroko)	人形劇団主宰	
研究協力者	吉原 深和子 (Yoshihara Miwako)	ロシア文学・人形研究	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	コストロヴァ ナターリア (Kostrova Nataliia)	国立アカデミー中央人形劇場附属劇人形博物館・キュレーター	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関